

哲学と宗教 全史

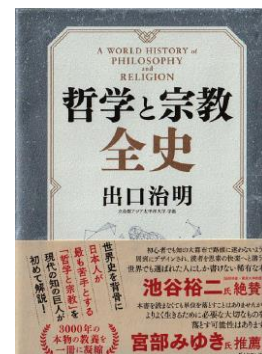
読書感想文

2020年5月6日

1. 本書を読む目的

小生、大学時代から哲学や宗教に興味があり、多くの本を読み考えてきた。ここ数年、一生のテーマ“人間らしく生きる”の中で、現地現物を実施し、更に具体的に自分のものにしてきた。

今般、まだまだ断片的な知識と考え方を系統的に整理するために、本書を読み更に深堀していく。



2. 著者紹介 出口治明氏

1948年 三重県美杉村(現・津市)4月18日出生まれ

1972年 京都大学法学部(専攻:憲法)を卒業

1972年 日本生命保険相互会社に入社、

ロンドン現地法人社長、国際業務部長などを歴任

2005年 東京大学総長室アドバイザー

2007年 早稲田大学大学院講師

2008年 ライフネット生命保険株式会社を開業、代表取締役社長に就任

2010年 慶應義塾大学講師

2013年 ライフネット生命保険株式会社代表取締役会長に就任

2017年 ライフネット生命保険株式会社代表取締役会長を退任

2018年 立命館アジア太平洋大学学長に就任(現在に至る)



3. 本書のキーワード (抜粋)

『哲学と宗教、その定義づけについて

哲学とは、物事を根本原理から統一的に把握・理解しようとする学問。古代ギリシアでは学問一般を意味し、近代における諸科学の分化・独立以降、諸科学の批判的吟味や基礎づけを旨とする学問、世界・社会関係・人生などの原理を追求する学問となる。認識論・倫理学・存在論・美学などを部門として含む。俗に、経験などから築き上げた人生観・世界観。

宗教とは神または何らかの超越的絶対者、あるいは卑俗なものから分離され禁忌された神聖なものに関する信仰・行事・制度。また、それらの体系。帰依者は精神的共同社会(教団)を営む。アニミズム・自然崇拜・トーテミズムなどの自然宗教、特定の民族が信仰する民族宗教、世界的宗教すなわち仏教・キリスト教・イスラム教など。多くは経典・教義・典礼などを何らかの形で持つ。教祖がいる場合は創唱宗教と呼び、自然宗教と区別する。』

『現代の学問は微に入り細を穿ち、あまりにもタコツボ化しているように思われます。世界をトータルに理解する必要性はますます高まっています。僕は歴史が大好きですが、人類の悠久の歴史を紐解いてみると、世界を丸ごと理解しようとチャレンジした無数の哲学者がいたことに気づかされます。同じような意味で、病や老い、死などについて恐れ戦く人々を丸ごと救おうとした宗教家もたくさんいました。この本では、世界を丸ごと把握し、苦しんでいる世界中の人々を丸ごと救おうとした偉大な先達たちの思想や事績を、丸ごと皆さんに紹介したいと思っています。皆さんが世界を丸ごと理解しようとするときの参考になれば、著者としてこれほど嬉しいことはありません。』

『一方において、次のようにも考えました。さまざまなビジネスの世界で、仕事のヒントを与えてくれたり、仕事が行き詰まったときに新鮮な発想をもたらしてくれるのは、専門分野の知識やデータよりも、異質な世界の歴史や出来事であることが多いという事実を。この観点に立てば、人類の知の葛藤から生み出された哲学や宗教を学ぶことは、日常のビジネスの世界にとっても、有益となるのではないかと思うのです。本書を執筆した目的の一つには、そのことも含まれています。哲学や宗教は、まだまだ人間の知の泉の一つであると思うのです。皆さんは、「哲学と宗教はかなり異なるのではないか」あるいは「哲学だけでいいのではないか」などと思われるかもしれませんが、この問いに対する答えは簡単です。イブンスーナー、トマスーアキナス、カントなどの偉大な哲学者はすべて哲学と宗教の関係を紐解くことに多大の精力を注ぎました。歴史的事実として、哲学と宗教は不即不離の関係にあるのです。』

『レヴィ＝ストロースの構造主義が登場して哲学の役割は終わったのだろうか？

世界はどうして生まれたのか？

人間はどこからきてどこへ行くのか？

人間は何のために生きているのか？

そのような根本的な命題を念頭に置いて、人間の哲学と宗教の歩みを20世紀まで追いかけてきました。

第二次世界大戦が終わったとき、世界の多くの人々が次のように考えました。

「もう一度、人間は進歩できるのではないか。ヘーゲルの絶対精神やマルクスの唯物史観によってではなく、自由な人間が主体的に行動することによって」

この考え方は自由社会で大きな支持を得ました。サルトルのことは知らなくても、このイデオロギーは、未だに根強く残っています。

けれどレヴィ＝ストロースは、「人間は自由な存在ではないし、主体的にも大した行動はできない」との認識を示しました。この徹底的な唯物論の割り切った思考が登場したことで、人間の思考パターンはほとんど出尽くしたように思われます。これからの時代、大学の哲学科に進もうと考える学生がたくさんいるのかな、そんなことも心配になります。

自然科学が発達し脳の学問も進歩した結果、人間の世界から未知の分野は激減しました。哲学や神学そして宗教が果たしてきた役割は、どんどん小さくなっていることは現在の世界の趨勢であるようにも思われます。人々の哲学や宗教への関心が薄くなるのは当然かもしれません。第一、就活には役に立たない、そんな声も聞こえてきそうです。

しかし、人間が何千年という長い時間の中で、よりよく生きるために、また死の恐怖から逃れるために、必死に考えてきたことの結晶が哲学と宗教の歴史でもあります。もしかすると、どこかに明日への扉を開く重大なヒントが隠されているのかもしれない。少なくとも僕はそう信じて、この本を書きました。』

4. 感想文

この本は、3000年に渡る哲学と宗教を体系的に分かりやすく書かれた入門書という感じであった。自分が持っている断片的な哲学や宗教の知識を3000年という年表に連関図の様に並べてくれている。更に各哲学者や宗教家を端的に紹介してくれている。

難しい思想が易くされすぎずに、腹落ちする言葉で語られている。それぞれの各論が著者によってよく咀嚼され消化され、しかし養分は損なわずに与えられ続けたような感じがした。

全465ページ。今後の小生のガイドブック、指南書である。

冒頭の哲学とはと宗教とはの定義は、リスタートする自分にとって改めて理解ができてたいへん助かった。広辞苑からの引用とのことだが、非常に難しい事をこれだけ端的に言い表せるのは誰でもできる事ではない。

合わせて、混沌とした現代社会において、世界を丸ごと把握するために改めて哲学や宗教を知ることの意義がわかった。読み続ける途中、哲学者としてアイザック・ニュートンやガリレオ・ガリレイなどの科学者、レオナルド・ダ・ヴィンチなどの芸術家が登場するが、一瞬違和感を感じたが、冒頭哲学の定義がきちっとされていたので深く納得することができた。

著者が最後に言っている、人間が何千年という長い時間の中で、よりよく生きるために、また死の恐怖から逃れるために、必死に考えてきたことの結晶が哲学と宗教の歴史でもある。明日への扉を開く重大なヒントが隠されているのかもしれない、と。小生もそう思う。今後益々、AI、ロボット、アンドロイドが人間に変わって仕事をするようになるだろうし、場合によっては機械が感情を持つことになるかもしれない。

その時我々人間は、機械に支配されないためにも、常に人間とは何かを知っていなければならないと思う。そのための哲学と宗教が必要なのである。